

## 《論 文》

# 日本における英語早期教育の問題点

大 橋 敦 夫  
柳 浦 恭

### 1. 序 論

英語教育についてはいろいろと言われているが、結局のところ「役に立つ英語教育」ということに帰着すると思われる。そしてこの「役に立つ」とは何かと問われれば、「外人と会話ができること」を意味していると考えてよい。こういった要求は従来の読み書きに重点を置いた英語教育への、ある意味では健全な反動といえよう。幼児や小学生を対象とした英語の早期教育が注目されているのも、これが実用的な英語力養成の有効な手段として期待されているためであり、外国語はなるべく小さい時から母国語を習得するのと同じように、という発想は逆らい難い正論のように感じられる。しかしながら多くのいわゆる「正論」と同様に、英語の早期教育に関する議論には重要な見落としがある。このため欧米で成功している教授法を日本に持って来てもそのままの形では思ったほどの効果が得られるとは限らない。

本論ではまず、現在の外国語教育理論で有力な仮説とされているクラッシュェンのインプット仮説を概観する。次に、早期教育の成功例としてカナダにおけるイマージョン教育を考察する。そして最後にこれらを踏まえ、日本での英語早期教育の問題点を指摘し、その分析を試みようと思う。

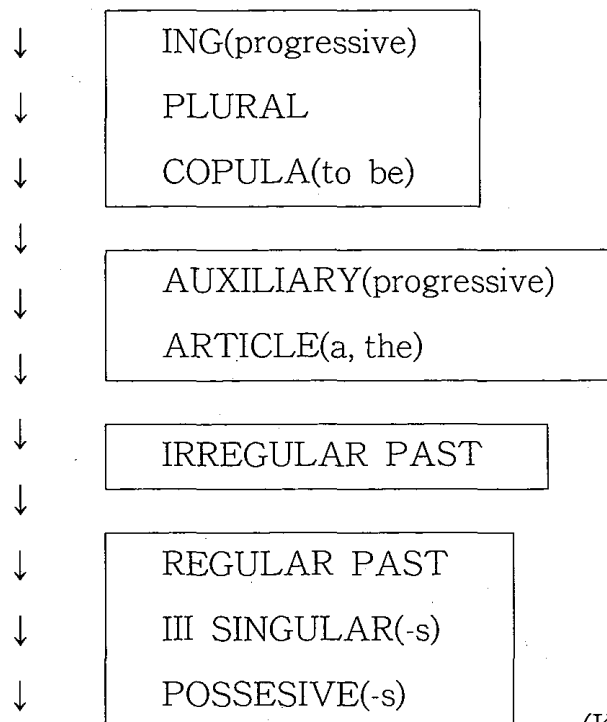
### 2. インプット仮説(The Input Hypothesis)

クラッシュェンによれば、学習者がその時点での言語能力よりも少しだけ高度なインプットの内容を理解したときに習得<sup>1)</sup>が起こるといふ。これはインプット仮説と呼ば

れ、母国語や第二言語の習得を説明する理論として有力視されている。この説を支持する専門家は言語教育において読むこと、聴くことの重要性を強調する。話す力、書く力は時間とともに自然に養われるというのが彼らの主張である。英語教育に当てはめて考えてみると、会話力は直接教え込むことによってではなく、理解可能なインプットを与え続けることにより自然発生的に生じてくるということになる。また、三人称単数現在の-sを習得するためにはこの構造を含むメッセージを聞いてこれを理解すればよいと考えるわけである。

この仮説をもう少し厳密に表現すると、「学習者は現在の言語レベル  $i$  から次のレベル  $i + 1$  へ、 $i + 1$  の構造を含む言語表現の内容そのものを理解することによって進む」という言い方ができる。内容の理解は文脈、言語外の情報、背景知識などの助けによって可能になると考えられている。また、習得には自然の順序 (the natural order) があるという説があり、クラッシュェンは大人も子供も第二言語の文法的形態素をほぼ同じ順序で習得するとしている<sup>2)</sup>。次の図は第二言語としての英語における、文法的形態素の習得の順序を示している。

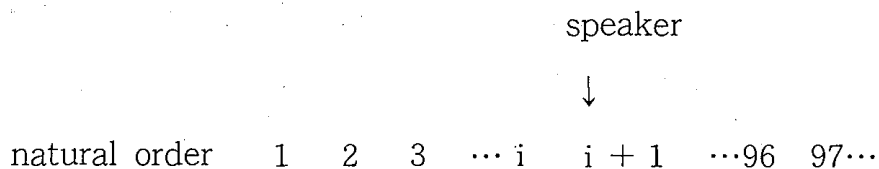
Average Order of Acquisition of Grammatical Morphemes for  
English as a Second Language (Children and Adults)



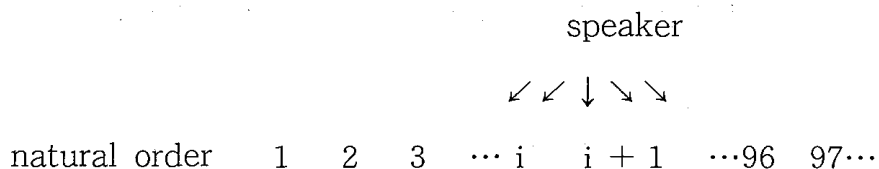
(Krashen & Terrell 1983:29)

さらに学習者に対するインプットの与え方について、クラッシュェンは必ずしも  $i + 1$  のレベルだけに絞り込む (finely-tuned input) 必要はないと考えており、例えば既に -ing 形や複数形などを習得した学習者に対し、教師が意識的に助動詞や冠詞を多く含むインプットを提供する必要はないと述べている。これによって、現場で教師のすることは非常に単純となり、聞いたこと、読んだことを学習者が理解できるよう配慮すればよいことになる。インプットが理解され、しかもそのインプットが十分な量に達していれば  $i + 1$  の構造は自動的に含まれるためである。もちろん同時に他の構造も混じっていることになるが、豊富な  $i + 1$  に接するとともに以前習得した構造の復習も可能となるので習得には適していると考えられている。このように学習者が理解できるように配慮しながら話しかけるとき、話し手は学習者の言語レベル、すはわち  $i$  の周りにあたかも網を投げかけるようにして、大まかに調整されたインプットを与えていることになる (roughly-tuned input)。これら二種類のインプットの違いを図で表すと次のようになる。

#### Finely-Tuned Input



#### Roughly-Tuned Input



(Krashen & Terrell 1983:33)

### 3. イマージョン教育 (Immersion Programs)

カナダの英語話者を対象としたフランス語のイマージョン教育はめざましい成功をおさめ、インプット仮説を裏付ける証拠として言及されることが多い。イマージョンとは学校の科目を生徒の第二言語を媒体として教える言語教育の一種で、いろいろな種類があるがだいたい次の四つに大別される。

a) 早期の全面的イマージョン(early total immersion)

幼稚園や小学校の園児、児童を対象としてほぼ全ての科目を対象言語で行うもの。

b) 遅くからの全面的イマージョン(late total immersion)

主として思春期以降の生徒、学生を対象としてほぼ全ての科目を対象言語で行うもの。

c) 早期の部分的イマージョン(early partial immersion)

a)と同じ学習者を対象としてカリキュラムの一部を対象言語で行うもの。

d) 遅くからの部分的イマージョン(late partial immersion)

b)と同じ学習者を対象としてカリキュラムの一部を対象言語で行うもの。

イマージョン・プログラムでは教師を除き、対象言語を母国語とする人間は含まないよう配慮されていることが多く、これによって教師が学習者の言語レベルに対し最適のインプットを提供することが可能となる。インプットの供給源は主として教師と教材の二つによっており、家庭や近所で対象言語を話す機会はあまりないという学習者が大部分を占めている。

イマージョン教育はさまざまな条件のもとで詳しい研究が行われているが、その多くが次の三点で一致している (Krashen 1989:58)。

a) イマージョン学習者は母国語の英語に関し、英語だけで教育を受けたものに劣らない。

b) イマージョン学習者は学科の知識について、英語だけで教育を受けたものに劣らない。

c) イマージョン学習者は対象言語の能力において、通常の外国語コース受講者よりも上達が著しい。

学習者の語学力がプログラム実施中に母国語なみの水準に達することは比較的まれで、やはり話すと発音の訛りや文法的誤りが残るといふ。しかしながら、全体としてその成果は素晴らしく、ランバートとタッカーは次のように述べている。

There is no question that given opportunities to use French in diverse social situations, the (immersion) children...could become indistinguishable from native speakers of French in their oral expression, and at the same time they would profit fully from instruction presented in either of their languages. (Lambert and Tucker 1972:152)

(イマージョン教育を受けた子供たちは、さまざまな社会的場面でフランス語を使う機会さえあれば、間違いなく母国語話者と区別できないぐらいに話せるようになると思われる。また同時に、母国語でもフランス語でもどちらの言語を媒体とした教育からも十分な利益を得ることができるであろう。)〔筆者訳〕

イマージョンでは第二言語そのものではなく、その言語を媒体として学校の科目を勉強する。このために学習者の注意は言語形式よりも伝達される内容そのものに集中することになる。また、クラス編成に関しては対象言語の母国語話者を除いてあり、言語能力の点でレベルの均一化が図られている。したがって教師は学習者が理解できるように話すことによって、自然と  $i + 1$  をふんだんに含んだインプットを提供することができる。インプット仮説の立場から見て、これらの条件を備えたイマージョン教育は言語習得のための理想的な環境といえる。

#### 4. 日本における英語の早期教育

日本における外国語教育の問題の歴史は長く、論争史に登場してくる論者は多彩でその主張もさまざまなものがある。その中でも夏目漱石が明治四十四年、『学生』誌に発表した「語学力養成について」という文章は特に優れたもので、上智大学の渡部昇一教授によれば「質量共に一級」だといふ(平泉/渡部 1975:78)。ここで漱石は英語教育を改善するために「時間」と「教授法」と「教師」の三つの要因を取り上げたが、確かにこれは卓見といってよい。彼が論じたのは当時の高等学校や大学における英語教育だが、この視点は現代の英語教育、そして早期教育について考える際にも

示唆に富んでいる。そこで本論でも、日本におけるイマージョン教育やその他の可能性について、上述の三つの点から考察を進めることにする。

### (1) 日本におけるイマージョン教育の可能性について

3. でみたように、カナダにおけるイマージョン教育は著しい成果をあげているが、実は日本でも明治の早い時期にはこれに近いことが高等教育の場で行われていたことがあった。漱石が学問をした頃までは数学、歴史、地理、動植物などの学科はすべて英語の教科書を用い、外人教師による授業も多かったという。当時は英語を勉強するというよりも、英語で学問を習うという状況があったために、一般に学生の英語力はかなり高く、試験の答案まで英語で書く人がいたそうである。学生の語学力低下が問題になってきたのは明治の後半に入ってからのもので、これは日本の教育が正当な順序で発達した結果、外国語を使わず母国語だけで教育を受けられるようになったためであると考えられる。したがって、もしも現代の日本でイマージョン教育の方法論を早期から実践することが可能ならば、英語教育改善の切り札となり得るであろうことは想像に難くない。

しかしながら早期教育に限定して考えてみると、幼稚園や小学校の段階でイマージョンを成功させるためには時間と教員、特に後者の点で大きな変革を迫られることになるため、その実行は決して容易ではない。まず時間に関していうと、イマージョンは一日に数時間ずつ、少なくとも数年にわたって継続しなければあまり意味がない。したがって、幼稚園の段階で始めたプログラムは義務教育である小学校でそのまま続ける必要があることになる。このためには現行のカリキュラムの抜本的な改革を覚悟しなくてはならない。さらにはここで教員の問題も大きな障害となってくると思われる。つまり幼稚園と小学校の段階で英語を母国語なみに話す教員を大量に確保できなければならないわけだが、このことは同時に英語による授業ができない教員を大量に解雇するということを意味していると考えざるを得ない。明治・大正期に活躍した英語教育の大家、斎藤秀三郎は伝統文法の学習を基礎とする教授法を採用する理由として以下のように述べている。

There may be other and more ideal methods of teaching English, but they

are such as would necessitate a sweeping reform in the personnel of the English department of instruction. (Saito 1900:vi)

(他にももっと理想的な英語教授法はあるかもしれない。しかしながらそれは、英語科の教職員人事に関して大幅な改革を必要とするだろう。) [筆者訳]

ここで斎藤の言う「もっと理想的な英語教授法」とは当時のヨーロッパで提唱されていた一種の直接教授法を指すものと思われるが、現代のイメージョンも対象言語を媒体とするという点では直接教授法のバリエーションとあってよい。斎藤が今世紀の初めに指摘した状況は今日でも基本的にはそれほど変わっていないことに注意を促しておきたい。以上のことから、現代の日本における早期のイメージョン教育は理論的には可能でも、実施には多くの問題があると思われる。

## (2) その他の可能性について

イメージョン教育の実施が時間や教員の点で難しいとすれば、これらの要因を大きく変えることなく、教授法の工夫によって早期教育を改善できるかどうかの問題となってくる。まず幼児や児童は認知能力から考えて伝統文法を学ぶのには無理があり、これは問題外とすれば、その他の可能性として歌やゲームによって英語に親しませること、単語や日常表現を繰り返し聞かせてその定着を図ることなどが挙げられよう。しかしこういった方法は見かけ上の説得力はあるものの、インプット仮説の立場からみてそれほどの効果は期待できないといっても過言ではない。すなわち習得のためには理解可能なインプットの総量が問題となるのであって、週に多くて数時間の授業ではたとえ幼児でも母国語を覚えるようにはいかないためである。アメリカでの移民に対する英語教育では同じぐらいの時間数で効果をあげている例もあるが、これは教室外で日常的に接する理解可能なインプットの量が違うので比較にならない。この点について渡部教授の指摘は明快である。

「…アメリカ国内における英語教育というのは、当然のことながら日本の国語教育であり、特に工夫されているのは、スペイン系移民の子など、英語のできないアメリカ人 (!) 向けの国語教育なのである。つまりアメリカ国内において、アメリカ人が、英語に問題のあるアメリカ人に教える方法である。アメリカという環境があるところでアメリカ語を教えているのである。こんな明白なことにどうし

でもっと早く気が付かなかったのかと苦笑したが、それまでは、日本の英語教育の専門家がこの問題を指摘したものを読んだことも聞いたこともなかったから、まずは盲点と言うべきものであったと思う。」(渡部 1982:163)

さらにまた、たとえ街の英語塾などでみられるように外人の教師を雇ったとしても、幼稚園や学校を休ませて英語漬けにでもしなければ理解可能なインプットの量が不足するために、やはり大きな成果は期待できないと思われる。ここでも教室外で接するインプットの量が決定的な違いを生むことに変わりはないと言える。こうしてみるとインプット仮説の立場から考えるかぎり、教授法だけを工夫してみても、インプットの量の問題を解決しなければ英語の習得には結びつきにくいと考えられる。

## 5. 結 論

本論ではまずクラッシュェンのインプット仮説を概観し、次に早期教育の成功例としてカナダにおけるイマージョン教育を考察した。そしてさらに以上を踏まえ、時間・教授法・教師といった観点から、日本における英語の早期教育の可能性について分析を試みた。

イマージョンの場合は時間と教師、とりわけ教師に関して問題があり、日本の幼稚園、小学校の段階での実施は難しい。またその他の教授法を採るにしても、時間の制約から来る理解可能なインプットの不足を解消できない限り、望ましい結果は得られないと予測される。つまり極言するならば、子供に「幼児が母国語を覚えるように」英語を習得させるには家族で英語圏に移住するか、あるいは子供をアメリカンスクールに入学させるぐらいしか方法がないことになる。

カミンズによれば、母国語において獲得された、抽象概念を操作する高度な言語能力は第二言語を習得する際に転移するという<sup>3)</sup>。言い換えれば、幼いうちに母国語でしっかりと考える能力を開発しておけば、後になって外国語を習得するのに役立つということである<sup>4)</sup>。インプット仮説の立場からみて中途半端な英語の早期教育は効果に乏しく、保護者の気休めにしかならない。将来の豊かな言語生活のためにも、足元の母国語を見直す必要があるのではないだろうか。



[注]

- 1) クラッシュェンは習得(acquisition)と学習(learning)を区別して考えている。前者は無意識に行われる知識の獲得を、後者は意識的に行われる知識の獲得を意味する。幼児が母国語を覚えるのは習得で、受験生が単語帳を覚えるのは学習にあたる。本論では原則としてこの使い分けに従っているが、「学習者」という場合はこの限りではない。英語の文献でも単に“learner”とすることが多く、また「習得者」という日本語は分かりにくいいためである。なお詳しくは、(Krashen & Terrell 1983:26-27) を参照されたい。
- 2) これは“The natural order hypothesis”と呼ばれる。詳しくは (Krashen & Terrell 1983:28-30) を参照されたい。
- 3) カミンズ (Cummins 1980) によれば、言語能力は BICS (basic interpersonal and communicative skills) と CALP (cognitive academic language proficiency) との二つに大別されるという。前者は挨拶や決まり文句など、日常の条件反射的言語使用の能力を指し、後者は抽象概念を操作する能力を意味している。CALPの力は個々の言語を越えた普遍的なもので、いったん母国語を通じて獲得されると他の言語を習得するときに転移するとされている。

この点について最近、日本語教育に携わる人々の間からも、言語事項を中心とする国語教育の充実を求める声があがっている。
- 4) 成功例として、幕末明治初期に活躍した洋学者を挙げることができる。多くの者が、オランダ語なり、英語なり、フランス語なり、何らかの外国語を学ぶ前に、漢学を学んでいる。漢学は中国語の文献を読み解くのが基本であるが、当時は、それを日本語として読んでいた。すなわち、白文で(中国語として)読むのではなく、返り点などを工夫し、日本語の語順で解釈していたのである。したがって、漢学の言語を学ぶことは、日本語(母国語)を学ぶことでもあったのである。漢字・漢語は、日本語にとっては語彙体系の支えであり、抽象思考には欠かせぬものである。洋学者は、漢学を学ぶことによって抽象概念を操作する高度な言語能力を身につけており、それが後の外国語習得の成功につながったとみてよい。

[参 考 文 献]

- Cummins, J. 1980. "The cross-lingual dimensions of language proficiency: Implications for bilingual education." *TESOL Quarterly* 14: 175-187.
- Krashen, S., and Terrell, T. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Hayward, Calif.: Alemany Press.
- Krashen, S. 1989. *Language Acquisition and Language Education*. New York: Prentice Hall.
- Lambert, W., and Tucker, G. R. 1972. *Bilingual Education of Children*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Saito, H. 1900. *Practical English Lessons*. Vol. 2. Tokyo: Kobunsha.
- 高梨健吉／大村喜吉 1975 『日本の英語教育史』 東京：大修館書店
- 平泉渉／渡部昇一 1975 『英語教育大論争』 東京：文藝春秋
- 渡部昇一 1982 『ことば・文化・教育 —アングロ・サクソン文明の周辺—』 東京：大修館書店

(大橋敦夫 本学講師)

柳浦 恭 東京農業大学非常勤講師)